

【話題の提示】— 日本人の人間関係は欧米と比べて柔らかい —

1 親族用語で相手を呼ぶことも相手を三人称扱いにしていると言えますし、これまで人称代名詞として挙げられた語彙の殆どが、ヨーロッパ語のそれとは違う場所や方角を示す言葉の転用だということが明
 言い換え
 2 つまり日本語ではヨーロッパ語とは違って直接話の相手を言葉で指すことを極力避けて、その人の社会的地位、自分の家族関係、そしてその人のいる場所や方角をいうことで、間接的に相手だということを示すのです。相手との関係はむき出しの直接的なものより、やわわりとした間接性のあるほうがよいというこの感覚は、古い日本の作法で人と話をするとき相手の顔を真正面に見ることが無作法であり、また相手の目を直視しつづけることは避けるべきだとしていたことにも
 3 つまり日本人の平常の人間関係のあり方をいふことも言葉と文章の点から見れば、対立対決の欧米型とは異なり柔らかいかなまのと言えぬでしょう。

【対比と考察】— 欧米の言語での対話と日本語での対話、テニスとスカッシュ —

比喩

2 以上のことから私は欧米の言語に見られるような一人称と二人称の交換による対話とは、言葉というボールを二人が互いに相手を狙って打ち合うテニスのようなものだと思います。ゲームの進行中、球の打ち手と受け手がぐるぐる変わるように二人の間には一人称と二人称の交替を繰り返すのです。

3 二人対二人でも私は日本語での対話とは、スポーツでいえば相手を直接狙わないスカッシュにたとえられる表現になります。この場合、話し手の言葉はまず一度壁に当たられ、それが反射して相手のほうに流れていくわけです。ですからこのとき相手の二人称としての相手ではなく、すでに他者つまり三人称なの
 4 相手不在の、このことを別の角度から見ると、日本人は多くの場合相手がいることを前提にも、話はその自体直接的

比喩

【筆者の意見】— 日本人が議論の下手な理由 —

4 このことが概して日本人は議論が下手だと評されるのは無関係でないと思っております。相手をよく見つ、何処が弱点で何処を突けば勝つのかという、相手を自分が望むように動かして追い込む戦術が弱いのです。これは当然で、相手がいながら、なるべく相手を見ないようにする文化的な癖が、対決の場面をなるべく避けようとして、相手がこちらの発言に対して「なんだ、さうか」と慌てて「そんなつもりで言ったのではないのです」というような相手をなだめようとする傾向があります。
 理由① 対話の仕組のものが対立対決的な、同じ社会的な枠組みを共有する仲間同士の相手とは異なる傾向があります。
 5 1) 1) また日本語では対話や議論が対立的なものなるといってしまいがちです。自称詞と対称詞が多々の場面で話し手の相手との上下関係を構造的に取らなければならないからだと思います。相手をお父さんと呼ぶことは、そのことで自分を意下つまり相手の目下と自己規定してしまっただけですから、初めから立場が弱いわけです。あるアメリカの論文で、父親をどう呼ぶかの調査の対象となったある青年が、自分は父親と議論するとき、絶対「Father」と呼びかけるといって、「貴様」you を使おうとしてくるのを答えています。日本語では言語上「わが」が出来なるといいます。

鈴木孝夫『日本語教のすすめ』二〇〇九・一〇

要約例

日本の人間関係は柔らかい。欧米と日本の対話はテニスとスカッシュに喩えられ、日本語は独り言の性質を持つ。日本人が議論下手なのは同意協調を前提とし、自称詞と対称詞が上下関係を構造的に取らんでいるからだ。(100p)

※要約のポイント — 対比関係・並列関係を見極める

今回の文章は対比と並列がきれいに並べられ、構造が非常に整っています。評論文の書き手は、自分の述べたいことを分かりやすくするために、このように対比を用いて説明したり、その原因や理由を並べて述べたります。こうした関係を見極められると文章の構造が見えやすくなり、論旨も捉えやすくなります。